

「正誤表」(2023年版)

ページ	行	(誤)	(正)
3.1.4-2	27	各荷重時の曲げモーメント分布を図-2に示す.	各荷重時の第1層の曲げモーメント分布を図-3に示す.
3.1.4-2	36	つまり、柱端モーメントに関しては、鉛直荷重時と地震荷重時で十数%違うということである。また、軸方向変形を無視しているため、外柱に対する比 $m_{VH}$ は均等スパンであれば多スパンになっても同じである。多スパンの高層骨組において、柱の曲げモーメントに対する比 $m_{VH}$ が十数%異なった場合、柱軸方向変形の影響を考慮しても長期荷重時の柱曲げモーメントの相違はさらに小さくなり、結果として柱軸方向変形の影響による短期荷重時の柱の曲げモーメントの相違は数%にすぎないことになる。また、同様に梁の曲げモーメントの相違は数%にすぎないことになる。	つまり、柱端モーメントに関しては、鉛直荷重時は地震荷重時の十数%である。ここでは軸方向変形を無視しているため、外柱の曲げモーメント比 $m_{VH}$ は均等スパンであれば多スパンになっても同じである。多スパンの高層骨組において、柱軸方向変形考慮の有無により鉛直荷重時の柱曲げモーメントが 20~30%相違したとしても、鉛直荷重時と地震荷重時の柱曲げモーメント比 $m_{VH}$ が十数%であれば、短期荷重時の柱の曲げモーメントの相違は数%にすぎないことになる。また、同様に梁の曲げモーメントの相違も数%にすぎないことになる。
3.1.6-3	9	$\alpha_y = (0.043 + 1.64np_t + 0.43a/D + 0.33 \eta_0)(d/D)^2$	$\alpha_y = (0.043 + 1.64np_t + 0.043a/D + 0.33 \eta_0)(d/D)^2$
3.2.1-5	四角 内 11	$P_2 \times (4 \times 1 + 3 \times 0.75 + 2 \times 0.5 + 1 \times 0.25) \delta = 9.75P_2 \delta$	$P_2 \times (4 \times 1 + 3 \times 0.75 + 2 \times 0.5 + 1 \times 0.25) \delta = 7.5P_2 \delta$
3.2.6-1	図-1		
3.2.6-3	図-4		

3.2.6-3	17	$Q_{su} = \left\{ \frac{0.053p_t^{0.23}(F_c + 18)}{M/(Qd) + 0.12} + 0.85\sqrt{p_w\sigma_{wy}} \right\}$	$Q_{su} = \left\{ \frac{0.053p_t^{0.23}(F_c + 18)}{M/(Qd) + 0.12} + 0.85\sqrt{p_w\sigma_{wy}} \right\} bj$
3.2.6-4	18	付着信頼強度式は「 <u>図-3 付着割裂パターン</u> 」の	付着信頼強度式は「 <u>図-3 付着割裂パターン</u> 」の
3.2.6-5	4	$K_{st}=140A_w/(dbs)$	$K_{st}=140A_w/(dbs)$
3.2.6-7	図-7 (A)		
3.2.6-7	図-7 (B)		
4.1.1-3	6	$\Sigma_c M_{pn} \cong \min\{1.5_b M_p, 1.3_b M_{pn}\}$	$\Sigma_c M_{pn} \cong \min\{1.5_b M_p, 1.3_{\rho} M_{pn}\}$
4.2.3-2	14	(4) 壁厚 ( $t$ ) と梁幅 ( $B$ ) が曲げせん断剛性増大率に及ぼす影響: $\alpha_3$	(4) 壁厚 ( $t$ ) と梁幅 ( $b$ ) が曲げせん断剛性増大率に及ぼす影響: $\alpha_3$
5.3-1	11	Terzaghi	Terzaghi